

井伏鱒二全集

第三卷

筑
摩
書
房

井伏鱒二全集第三卷

昭和三十九年十二月二十五日發行

著 者 井 伏 鱒 二

發 行 者 古 田 晁

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京四七六五一(代表)
振替東京四一二三

本文用紙 三菱製紙株式會社
クロス 東洋クロス株式會社
印刷 株式會社 精興社
製本 牧製本印刷株式會社

目

次

増富の谿谷	三
小間物屋	一〇
隠岐別府村の守吉	二三
花の町	三
御神火	一九
吹越の城	一六
鐘供養の日	一八
二つの話	一七
經筒	二五
侘助	二九
追剥の話	三〇
當村大字霞ヶ森	三六
橋本屋	三四
引越やつれ	三四

因ノ島	四五
-----	----

解題	四七
----	----

井伏鱒二全集

第三卷

増富の谿谷

數年前の九月上旬、釣師の佐藤垢石老に連れられて本谷川へやまめ釣に行つた。釣果は思はしくなかつたが、そのころ釣といふものに大して興味を持たなかつた私は、それよりも本谷川の區切り取つてゐる谿谷風景に満足した。

この谿谷を増富の谿谷といふ。九月だといふのに尙まだ山楓が若芽を出し、それが若芽のまま紅葉しかけてゐた。突如として聳える岩山が、紅葉した蔦の葉ですつかり覆はれてゐるのも見た。溪流は眞下に見え、谷向うの山にはところどころに炭焼の竈かまどがあつた。その竈から取出した炭火が木の間に赤く妖しげに見え、炭火のほてりは谷を距ててゐながら私たちの頬に感じられた。谷がそんなに間近かく迫つてゐた。

私たちはその川かみの鑛泉宿に一泊し、翌朝、早く出發して棧道を川しもに向つて引返して來た。すると急に谷が擴がつて見える切通しの下り口に、大きな胡桃くるみの木があつた。青い實が鈴なりに枝についてゐた。幹は三人で抱へてもまだ抱へきれないやうな大ききで、こんな大きな胡桃の木はまだ見たことがなかつた。

私は不可解なやうな氣持がした。それはこの木が單に大きすぎるからではなくて、昨日この山路を來るとき、なぜこんな珍しい大きな木に氣がつかなくかつたらうといふ疑ひであつた。

垢石老も不思議さうに胡桃の木を見てゐたので、私はたづねた。

「翁^{おきな}や、この木は、昨日もこの道ばたにあつたかしら。僕は、つい見なかつたと思ふんだけど、翁は、見たかね。」

垢石老は白い口髭を喰ひ反らせ、溪流の音をきくやうな恰好で首をかしげ、その胡桃の木を穴のあくほど眺めてゐた。漸くにして彼は口をひらいた。

「はて、こいつは俺も見なかつた、と思ふんだがね。どうも變だ。こりや、まアるで變なもんだ。」

「この切通しは、こんな爪先あがりになつてゐる。だから僕たち、ここを登るとき足もとばかり見てゐたんだらうか。それにしても、下枝がこんなに垂れさがつて、道にかぶさつてゐる。氣がつかない筈がない。」

「この枝は、雪の重みか實の重みで、こんなに垂れ下つたんだらう。多年にわたる天然の仕業だね。けふ、急にここに移植したものぢやない。根元に山牛蒡も生えてゐる。」

不圖、垢石老は後^{うしろ}を振向いた。私も振向いたが誰もゐなかつた。

私たちは胡桃の木の詮索を止め、川しもの方に向つて歩いて來た。このあたりから路は暫く平坦になり、兩側の山は互に廣い間合を持つて、この山奥にいきなり孤立して一つの盆地が打ち開かれてゐる。耕地や水田のはづれに人家も見え、棚田の石崖の下を行く路は可なり廣い幅になつてゐる。

私たちは人家が行手に見えるので元氣づいてゐた。この部落には煙草屋があつた筈だから煙草を仕入れよ

う、もしその店にラムネを賣つてゐたら飲んで行かうなどと語り合つてゐた。

すると路の曲り角で、ぱつたり二人の娘に會つた。一人は二十ぐらゐで、紺がすりの着物をきて手拭をかぶり、目籠を背負つてゐた。一人は、一つ二つぐらゐ年下に見え、同じやうな服裝で矢張り目籠を背負つてゐた。それが二人とも、あまりに美しかつたので、私たちは立ちどまつた。娘さんの方でも立ちどまり、手拭をとつて私たちにお辭儀をした。その物腰に垢石老は好奇の瞳を向け、白い口髭をじつくりとまた喰ひ反らせた。

二人の娘さんは黙つて行きすぎようとした。それは何か、尊いものが消え失せて行つてゐるかのやうに思はれた。咄嗟に私は娘さんと呼びとめた。

「ちよつと伺ひますが、バスの乗場に出るには、どう行つたらいいでせうか。」

年上の方の娘さんは、落ちついて川しもの方を指さした。

「この路を、どこまでもおいでになりますと、バスの乗場に出ます。路は一本路です。」

「どうも有難う。つまり、この路をどこまでも行くと、バスの乗場に出るのですね。路は一本路ですね。」娘は軽く頷いた。しかし、ただそれだけのことであつた。

私たちは娘の後姿が見えなくなるまで見送つてゐた。垢石老は目をこらして見てゐたが、路の曲り角に娘の姿がかくれると、口をひらいた。

「すごいなあ、これは。まあるで、鄙ひなまれだ。まあるで繪のやうだ。俺は、方々の田舎に釣に行くが、あんなきれいな鄙まれは見たことがない。」

鄙まれとは、鄙にまれなる乙女の略語である。垢石老の即席造語かどうか知らないが、私も垢石老におとらず感歎の言葉を連發した。

「きれいだったなあ。いや、悪くない。あんな美しい恰好で、空間を占領してゐたら、きつと美の神が妬むだらう。もしもし翁や、翁は、いま若返りたいと痛感してるだらう。」

「いや、まアるで妙なものだ。ところがお前さんは、バスの乗場を知つてゐながら路をたづねた。これは旅の心得として、先づ、どういつたらしいものだらうな。」

「でも、幾山河を越えて行つても見よだ。ねえ翁や、實際さういふ感慨ではないだらうかね。」

「まアるで、そんなもんだらうな。」

私たちは娘の消え去つて行つた方を見ながらまだ立ちどまつてゐたが、漸くその場を離れて來た。

——それは數年前にあつた話である。ところが今年の夏、田中貢太郎氏が土佐から出京され、その歡迎會の席で私は村松梢風氏に會つた。

私は村松氏と將棋をさして、それからいろいろと旅の話や世間はなしをしてゐるうちに、どちらが云ひだしたともなく増富谿谷の話になつた。

村松氏は今から二十何年前に、増富の奥ヘラヂューム鑛泉の視察に行つたといふ。その鑛泉はラヂュームの含有量が世界で第二番目だといふ評判であつた。それで、その方面の専門の研究家に連れられて二人旅で行つたのださうである。

それを聞いて私も、増富の奥には數年前に垢石老と二人で出かけたことがあると云つた。そして、歸り途

に鄙まれを見たことを思ひ出し、それを云はうとすると私より先に村松さんが云つた。

「あの谿谷では、君、とてもきれいな娘を僕は見たんだよ。」

「いや、僕も見ました。そりや、とても鄙まれで……」

しかし村松さんが云つた。

「まあ聞きたまへ。君も知つてゐるだらうが、あの増富の谿谷は、山と山が手を合はせたやうに迫つてゐる。ところが、たつた一箇所、急に谷が廣くなつて水田や畑の見える部落がある……」

「それは、胡桃の木のあるところでせう。増富鑛泉から歸つて來ると、大きな胡桃の木が切通しの下にあるでせう。」

私が一種の期待をもつてたづねると、村松氏は頷いた。

「さうだ、大きな胡桃の木があつた。二た抱へもあるだらう。」

「いや、三人でもまだ抱へきれないでせう。僕は行く路では見なかつたんですが、歸りに氣がついて、大きな木だから驚きました。」

「さうか、僕も行きには氣がつかなくつたが、歸りに氣がついたね。もう二十年も前だが、僕も胡桃の木は覺えてゐる。あの胡桃の木のスし川しもへ來たところで、何しろ、美しい娘に會つたのだからね。」

私の驚きは重複した。

「僕もあの胡桃の木のスし川しものところで會つたんです。とても鄙まれの……」

「いや、それが君……」

村松さんは静かに手を私の方に出して来て、空間をつかむやうにその手をひろげて云つた。

「僕と友人が二人で歸つて來ると、石崖の下の曲り角でばつたり會つた。娘も二人連れでね。妹と姉さんだらう。紺がすりの着物をきて、それがお揃みたいな紺がすりなんだ。それから姐さんかぶりに手拭をかぶつて、目籠を背負つてゐた。僕たちを見ると、手拭をとつて、ちよつと軽くお辭儀をして通りすぎたね。その風情といひ、その容貌といひ、それは君、まあ何といつて形容したらいいか、もうまるで誰かの繪のやうだつたね……」

「いや、ちよつと待つて下さい。」

私は何か寒氣のやうなものを覺えた。

「僕の見たのとそれは、そつくり同じです。お揃のやうな紺がすり、姐さんかぶり、目籠。それで貴方の見た娘は、目籠のなかに草をいつぱい入れてゐましたか。僕の見たのは、ほんのすこし籠の底に入れてゐました。」

「僕の見たのと同じだね。何しろ九月上旬ごろだつたから、刈取つた草の莖は長かつた。年は二十ぐらゐのと、十八九ぐらゐかね。」

「それでは、貴方はその娘に、バスの乗場に出る路をたづねましたか。路を知つてながら、わざとたづねなかつたでせうか。」

「まさか……僕が行つたのは二十何年前だもの、バスなんか通つてなかつた。」

その點が違ふだけで、あとは申し合せたやうにみんな一致してゐた。私は胡桃の木の下枝を思

ひ出し、棚田の石崖の下をながれるきれいな溝川を思ひ出した。

——私はこの話を、石田君といふ去年大學卒業の青年に話した。すると石田君は目を光らせて、自分も増富の谿谷に是非とも行くと云ひ出した。

「では、さつそく行つて見ます。山と山の間隔が廣くなつて、水田のあるところですね。行きには僕、切通しのところは下を向いて歩きます。いや、下を見ないで平氣で歩きます。でも、僕が行つて来るまで、この話を怪談風に人に話さないで下さい。僕、怪談は嫌ひです。それに、この話は怪談ではなくて偶然の話ですからね。僕、その偶然を求めに行くんですから。」

石田君は自分自身に云ひきかせるかのやうに、指折り數へ二十何年間の年月を計算した。

小間物屋

私の友人で出征した人は今日までに可なりの數にのぼつたが、戦死したのは陸軍工兵伍長として出征した友田恭助君ひとりだけである。しかし私は生前の友田君とあまり親しくする機會がなかつたので、嚴密にいへば私の友人は一人も戦死しないといつてもいい。ところが最近のこと、私の親しい友人である岩田英之丞君が負傷した。脚部に負傷して歸還除隊になつたといふ噂が傳はつた。

岩田君の故郷は、尾ノ道市からすこし山のなかにはひつた栗原村といふところである。私は岩田君に見舞の手紙を出し、それから三日たつて岩田君を見舞に東京を出發した。私は岡山驛で普通列車に乗りかへて、それから尾ノ道驛で上下町行の電車に乗りかへた。丘陵性の山の麓の間を縫つて行く電車である。線路の兩側には棚田と段々畑の耕地が續いてゐた。栗原村に行くにはどこで下車したらいいかと車掌にたづねると、私の隣に腰をかけてインバネスを着てゐた乗客が「栗原村の何ちふ家に行かれるですか」と横合から口を出した。「栗原村の岩田といふ家に行きます」と答へると「栗原村の岩田といつても、三軒も四軒もあります

けん、一概に、岩田と云うただけではわからんですけんなあ」と云つた。その間に車掌は栗原驛下車の切符を切つてくれた。インバネスの男は詮索好きで、インバネスの兩の袖を後にはねのけて私に話しかけた。インバネスの絹の裏を見せるのが伊達な風だと思つてゐるらしい。

「ただ岩田というて訪ねたんでは、行つたり來たり無駄足せんけりやならんですけんなあ。總本家の岩田もあるし、新屋の岩田もありますけん、岩田というても何ちふ岩田かそれを云はんけにや、教へる方でも教へるわけにはいかんですけんなあ。」

私は逆ねぢを喰はされてゐるやうな氣がしたが、そこは如才なくしておくつもりで問ひ返した。

「さうですか、岩田といふうちは、そんなにたくさんありますか。」

インバネスの男は手を出して指を折りかぞへた。

「一軒、二軒、三軒、四軒……みなで四軒ありますけんなあ。なかでも、總本家の岩田は本身代で顔役ですけん。現に今も嫁入前の娘御があるもんで、仲人の口をきくと云うて行商の小間物屋が泊り込んで。もう十日も前から泊り込んで。さうしてから、晝間のうちは小間物の行商に出歩いて、夜になると岩田さんところへ歸つて行く。それでも、岩田さんのところでは黙つてをられますけんなあ。第一が顔役でもあるし、寄生蟲の一人や二人は平氣ですけん。小間物屋が娘御の悪口を云ひふらして歩くと、困りものですけんなあ。それに、東京で文士になると云うて困り者であつた長男が、今度、戦傷されたですけん。銃後の奉仕の氣持もあるやうなもんぢや。ところで、あんたは何ちふ岩田に行かれるですか。總本家の岩田なら栗原驛に降りて、向側の山の根に見える白壁の塀のある家ですけん。」